

茅 風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2013 年 12 月 27 日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 41 号



地元の先輩方が立てた見事な茅ボッチ

- ◆9月～12月の活動報告（事務局）……………1
◇季節のミニアルバムⅡ
秋の草木と蝶たち(多葉田五男)……………2
□一般参加歓迎プログラム2013④レポート
・恵みの里、藤原！（古高利男）……………4
・中之条ビエンナーレ2013(米山正寛)………5
□古民家再生・整備状況について(北山郁人)……7
◆環境教育関東ミーティング参加報告(浅川潔)………8
◆伊勢神宮参拝・視察ツアー催行報告(稲貴夫)………8
◇2013 暦年：活動実績のレビュー(事務局) ……10
◆藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑦(中村智子) ……11
○編集後記～塾長のつぶやき～ ……12
□イベント案内：東京学習会「小貝川の野焼きと
菅生沼の野焼き」(事務局)………別紙

■ 9 月～12 月の活動報告

事務局

●9月2日：東邦大学に西廣淳先生を訪問、イオン財団・環境活動助成応募に関わること推薦と向後の当塾活動のご指導方をお願い。(清水、松澤)

●9月14日：麗澤中学「麗鵬祭」。奥利根水源の森フィールドワークでの気づき・学びの発表会。笹岡、湯本、高野、川端、清水が参観、生徒諸君と再会！

●9月28日～30日：一般参加歓迎プログラム 2013④。ミズナラ林整備と自然観察。合間に地元の皆様方と野点を楽しみました。参加13名(含む地元・日帰り)。終了後、初の試みとしてエクスカッション「中之条&四万温泉」を催行。地元の名士・町田社長のご案内で、富岡家住宅や日向薬師堂などの茅葺重要伝建の視察と中之条ビエンナーレ展示作品の見学。(→2頁「季節のミニアルバム」、4頁古高さん&米山さんレポートご参照)

●10月10日：東邦大学主催セミナー「植生景観変遷の解明手法」に参加。(岡田、川端、笹岡、清水、松澤)講師は京都精華大学・小椋純一教授。上ノ原の景観や植生がどのように変遷してきたのか、その要因は何かなど思いめぐらしつつ拝聴。学ぶべき所、応用の余地ともに極めて大。ご案内いただいた西廣先生に大感謝。

●10月26日～27日：一般参加歓迎プログラム⑤茅刈り。あいにくの台風にて、1週間順延のやむなきに。

●11月2日～3日：一般参加歓迎プログラム⑤。1週間延期で参加者は減ったが、二日間述べ28人(除く、地元)が秋天のもと、待望の茅刈りに精を出した。(写真上) 西廣先生より、「茅の生育状況については、いくつかの観察区画を設けて継続的に比較調査をしてみたい」との貴重なご示唆をいただいた。なお、ボランティア活動の成果・260束の茅は今年も全量、地元藤原区に寄贈することとした。

●11月3日：「のらえもん自然塾」(古高利男代表・当塾

会員)の親子連れ30人を上ノ原にお迎えして、自然観察会やドングリ拾い、お絵かきなど楽しくおつきあい。

●11月16日～17日：一般参加歓迎プログラム⑥。茅ボッチの運び出しと「山の口終い」行事。ハードな作業で参加8名と過去最少だったが、地元の諸先輩方と協働して、合計 3,010 束の運び出しを完了。ボランティア分 260 束も大芦倉庫に無事搬入。(写真下) 萬枝さん、三郎さん、総一郎さん、渡辺さん、町田工業の皆さま、お疲れ様でしたありがとうございました。

●12月7日～8日：「環境教育関東ミーティング」2013に浅川、増井両幹事が参加、分科会『草原を活用することで蘇る地域の魅力』のプレゼンター役をつとめる。(8頁、参加報告ご参照)

●12月22日～23日：東京学習会「伊勢神宮参拝・視察」ツアー催行。稲幹事(神社本庁に勤務)の肝煎りで、16名が参加。(8頁、稲さんレポートご参照)



◆季節のミニアルバムⅡ：秋の草木と蝶たち

多葉田五男

9月28日、29日に開催された森林塾青水の定例活動に参加しました。上ノ原は一面のススキの穂が風に揺れカンタンを始め虫の鳴声に溢れ 秋の草木や蝶が目を楽しませてくれました。今回のプログラムはススキ草原散策、草木クラフト教室、野点などで 好天に恵まれ爽やかな高原の秋を満喫しました。

今回撮った写真のうち 実の目立つ木や草、花の美しい野草、秋に見られる蝶を紹介します。シオガマギクは上ノ原で初めて見た野草であり「ハハソの泉」近くでは初めてツマジロウラジャノメを観察し上ノ原の自然の素晴らしさを改めて感じました。



③ツルリンドウ(リンドウ科)



④ミヤマガマズミ(スイカズラ科)



①マユミ(ニシキギ科)



⑤シオガマギク(ゴマノハグサ科)



②コマユミ(ニシキギ科)



⑥ツリフネソウ(ツリフネソウ科)



⑦ヤマトリカブト(キンポウゲ科)



⑪ツマジロウラジャノメ♀(翅開長 約 55mm)



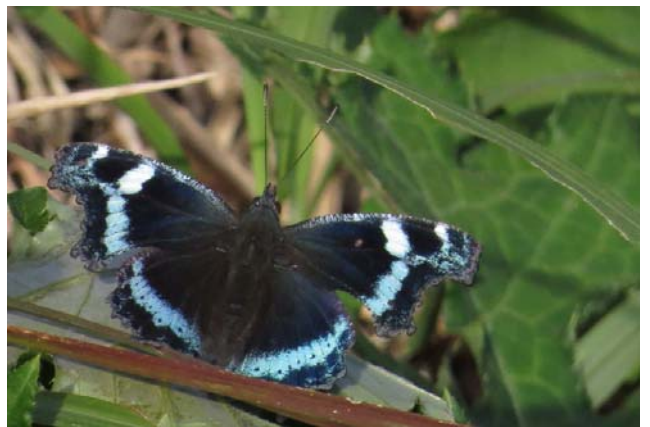
⑧シラヤマギク(キク科)



⑫同上



⑨アキノキリンソウ(キク科)



⑬ルリタテハ(50~65mm)



⑩サラシナショウマ(キンポウゲ科)



⑭メスグロヒヨモン♀(65~75mm)

■ 一般参加歓迎プログラム 2013④ 参加者レポート

◆ 恵みの里！藤原－9月28日・29日の参加レポート 古高利男

あらためて、藤原が「恵みの里」であることを実感した。そして、全国にあるであろう藤原のような里山を、過疎化に苦しんでいるとはいえ、けっして潰してはならないと思った。百年の計で見れば、里山の価値はますます高まっていくであろう。

○ コシアブラ・コゴミにウレイ鹿の肉 熊まで出てくる山宿の夕

民宿「たかね」の夕食。テーブルをみると、コシアブラの天ぷら・コゴミの和え物・ウレイのおひたし・エゾシカのフライ・熊肉のすき焼き風が並んでいる。山で手に入るものばかりだ。当に、山の恵みを食しているのだった。そして、調味料や嗜好品としての味噌・醤油・ビール・日本酒は田や畑の恵みである。

ここには、地に足の着いた里と山との恵みの供宴があった。

○ 落ち葉踏みコナラミズナラ森の中 ドングリ拾うキノコに出会う

○ 一つ取り袋に入れてまた一つ 次々拾うミズナラドングリ

ススキ草原上ノ原を登っていくと、広葉樹林帯に入る。コナラ・ミズナラの森である。木漏れ日の中を、落ち葉を踏みながら歩いて行く。と、自分自身を忘れるような静かな気持ちになってくる。ふと見ると、足元にはドングリがころがっているではないか。丸く大きめなのでミズナラだとわかる。一つ拾うと、また目に止まる。袋いっぱいまで拾ってしまった。ドングリだけでなく、ヤマブドウも見つけた。緑のサルナシの実を見つけた時には「ここにもあるんだ！」と感嘆した。サルナシは、北海道ではコクワと呼ばれ、山へ行ったら食べたことを思い出したからだ。霜が降りると柔らかくなり甘みがグンと増すのだった。真横に切ると、その断面はキーウィーにそっくりなのである。たくさん食べると尻の穴が痒くなる、と今は亡き父が話してくれたことがあった。



今度は、キノコに出会う。伐採したミズナラの切り口にはアラゲキクラゲ・カワラタケ・スエヒロタケなどが競うかのように生えている。落ち葉からは、白い茎で傘はつやつやのグレイの、それはそれは美しい貴婦人のようなキノコを見つけた。うっとりとしながら、そっと傘に触ってみた。まるで初恋の彼女の手をにぎるように胸が高鳴る。名前がわかれば、「○×△さん！」と呼べたのにと、悔しい思いだった。その他にも、チャダイゴケの仲間・ホコリタケの仲間・ヒトヨタケの仲間を確認した。前日、ホダ場で確認したナメコ・シイタケは、ここでは見つからなかった。

森の清掃人の役目をしているというキノコに出会うと、「がんばれよ！ありがとう！」という思いが浮かんでくるのだった。

○ 風が吹く上ノ原の草原に 黄を誇示する女郎花咲き

○ オミナエシオバナハギズ上ノ原 りの花を探して歩く

ススキの間から、所々に女郎花が咲いている。鮮やかな黄色で、その美しさに見とれてしまう。自然の中で咲く色は、どうして美しいのでしょうか？フジバカマ・ナデシコ・キキョウは、上ノ原では出会っていませんが、七種そろっているのでしょうか？秋になると、七種そろった中を散策できる上ノ原でありたいですね。

○ ドングリに穴を開けての笛づくり 上ノ原には笑いも響く



ブルーシートの上にドングリを広げ、岡田講師の教えを受けながら、森林塾から多葉田・米山・古高が、地元からは林畠み子・阿部典子・深津フミ子・木曾武子が集まって、無心にドングリに穴を開けている。「鳴った！」と童心に還る表情。そして、「いいね！いいね！」と励まし合う言葉が上ノ原の草原に吸い込まれていく。

○ 一本の真白い紐が動き出す ハリガネムシをまじまじと見る

ははその泉で一休止しているとき、水面に白い一本の紐のようなものが浮かんでいた。「ゴミかな？」と思った。清水さんが、怪訝そうな顔をしながら水面からそっと引き上げた。私が受け取った。「動いているよ！」と声がかかる。よ〜く見ると、先っぽがゆっくりと動いている。およそ

40センチぐらいで、針金のように硬い感じだ。すぐに思い出した。「ハリガネムシだ!」。図鑑で読んだ記憶によれば、カマキリに寄生し、水辺にくと飛び出してしまうということだった。実物は初めてで、「なるほどな〜」とじっくり観察させてもらった。ラッキーだった!「きれいな水」といっているのはその泉には、こんな虫の卵も含まれているのかもしれませんが。でも、宿主は昆虫なので、人間は害を受けない。ご安心を!

○ 虫の音に耳を澄ませばススキ揺れ

山の向こうにまん丸の月

「来年の仲秋の名月は、ここで鑑賞しよう!」と清水さんが提案する。ススキが揺れる山の上にはまん丸の月が・・・、ブルーシートの上ではお団子をほおぼり、酒を酌み交わしている。耳を澄ませばカンタンのフィルルルルルの低い鳴き声が聞こえてくる。そして、みんなで一句詠んでいる。こんな情景になるのだろうか?

ここ上ノ原は、どこを歩いても、聞こえてくるのはカンタンのうら悲しい鳴き声ばかりだ。他には、キリギリスが十郎太の泉近くで、ギーギーと鳴いていたが・・・。



カンタンの成虫を求めて、多葉田さんが草原を探し歩いた。「これでは?」と見せてくれた実物を見て、背中が薄茶色をしていてツユムシのような感じ、と頭にたたき込む。写真も撮った。

家に帰ってから図鑑で調べてみた。「クズの葉に多い。エサはアリマキや草。ヨモギなどの茎の中に卵を産む。」という。夕飯でビールを傾けながら、カンタンの鳴き声を探してみた。聞こえてくるのは、アオマツムシの甲高いリーリーリーばかりで、ときどきアマガエルが割り込んでくる。そして、コオロギの弱々しい声が、かすかに聞こえてくるだけだった。田んぼや森を歩いてみても、カンタンの声には出会わなかった。カンタンは、自然度の高い所にしか住んでいないのかもしれない。

○ 田と山を十二神様が見守って

大地の恵み藤原の里

春はウド・ゼンマイ・ワラビ・コゴミ・ウルイ・コシアブラ・フキ・フキノトウなどの山菜採り、夏は岩魚釣り、秋はキノコ採りにドングリ・クリ・ブドウ・サルナシ・マタタビにツルウメ・モドキ・ススキのような飾り物まで、その間に田畑を耕し米・野菜をつくる。さらには、夏の涼に冬のスキー、紅葉峡や谷川岳の四季折々の風景、空気の清浄なこと・

星がよく観察できること・ホテルが舞っていること、猿・熊・ヒル・野鳥がいること、カンタンが鳴きたくさんの湧水に恵まれていること、等々直接経済では計れないが人々の心の癒しの空間も提供されている。

とすると、藤原の里は、人々の暮らしを多様に支えてきた「生産の場」であり、その生産は藤原の人々だけではなく、利根川流域の人々の暮らしをも支えてきたのだといえないだろうか。

大都市東京といえども、全国の「生産の場」に支えられて生きていることを考えれば、「生産の場」としての原点である里山を衰退させてはならないだろう。

藤原の「生産の場」としての役割は、益々必要とされているのだ。持続し続けようとする藤原を、私は胸を張って応援したいと思う。

追記

エスキモーの言い伝えに、「ヒラキヒミ」という言葉がある。「自然の声に耳を傾けよ」という意味だという。(2013年10月3日、NHK「地球イチバン!」より)

生態系の中でしか生きられない人間。しかし、経済とか科学とかで自然を制圧(コントロール)できると考える人間。自然を畏怖・享受・感謝する気持ちを、人間はすっかり忘れてしまったようだ。

◆中之条ビエンナーレ2013

米山正寛

美術館やギャラリーを飛び出して現代美術の作品を展示し、しかもその会場を整備された庭や公園でもなく、里山や海辺といった野外とか、ひなびた集落の廃校や民家などに求める取り組みが広がっている。アートそのものの意外性を楽しむことはもちろん、アートを通して自然環境の魅力を見直したり地域の活性化につなげたりするのも大きな狙いだ。

日本での草分けとなったのは、2000年以来3年ごとに新潟県の里山で開かれている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」。昨年(2012年)の第5回に私自身が行って、会場となった広い地域の一面を巡り、「人間は自然に内包される」というテーマを素直に味わうことができた。今年(2013年)は第2回「瀬戸内国際芸術祭」が約100日にわたって開催されたため、107万人もの観客が会場となる島々を訪れた様子が、多くのニュースに取り上げられていた。

森林塾青水の9月28~29日のイベント(ミズナラ林整備)後、29~30日にオプショナルツアーで出かけた群馬県中之条町でも、2007年に始まって第4回となる「中之条ビエンナーレ」がちょうど開催中だった。上ノ原の茅を毎年引き取ってもらっている町田工業の地元でもあることから、社長の町田茂さんの案内で、温泉街から里山の神社、農協の倉庫、そして町田工業の社屋の向かいにある「伊参(ルビ:いさま)スタジオ」(廃止された中学校を改修した映画施設)などを回って、いくつかの展示作品を見ることができた。現代アートの一端に触れてもらえるよう、気になった作品を紹介しておきたい。

「フィギュア 聖地巡礼:四万温泉 積善館」(飯野鉄心)



中之条町で泊まった積善館本館は映画「千と千尋の神隠し」に出てきた湯屋のイメージモデルの一つだとされる。製作したフィギュアを、ゆかりの地で写真に撮る。それを張っただけの展示は、多くの人が気付かずに通り過ぎていた。

「跡」(齋木三男)。



地元出身の石工職人の作品。この神社の境内で毎年5月に開かれる例祭には、多くの人々が集まるそうだ。丸く配置された石の表面には、波紋が掘り込まれていた。年に一度の賑わいを見せる、一瞬の時を示しているのだろうか。

「慧」(大野公士)。



誰もが京都・竜安寺の石庭と重ねてイメージを比べるだろう。作品名は人間の知恵を意味する。知恵により多くを手にしてきた我らの存在は、石庭のイメージする深遠な宇宙の中で、どのように位置づけられるのか。まだ誰も答えを知らない。

「見えない記憶」(三浦かおり)。



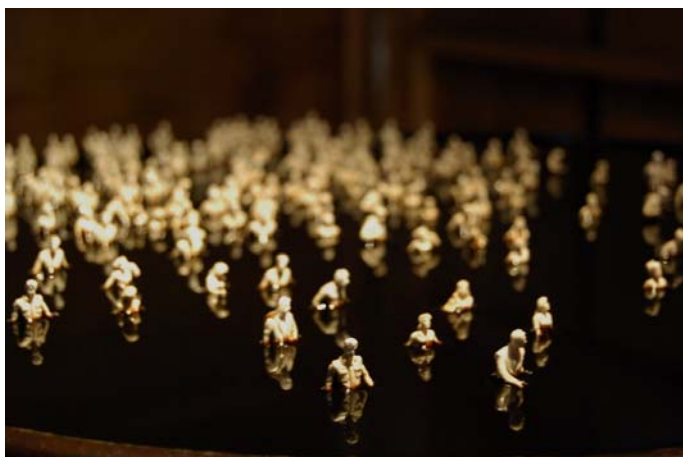
古く広い倉庫の空間に吊るされ、また重ねられているたくさんの白い布に目を奪われた。照明の中で浮かび上がる幻想的な光景で、この土地の人々の思いや物が持つ長い歴史を表現したという。

「Honeycomb room」(森本一朗)。



廃校の裏山に立つ木の上に巨大な立体を見つけた。ハチの気持ちを思いながら上って入って見たら、空間は予想以上に広がった。子どもの頃に夢見た「秘密基地」を得た気分。「ハチの巣は、もっと仕切られているはずだ」なんて言うのは野暮か。作者は「予想もしなかった反応」を楽しんでいるようだ。

「時間」(トマーシュ・ウェンドランド)。



黒い廃油の海の中に、小さな白い人形たちがうごめくように並んでいる。出展したポーランド人作家の次のような言葉を新聞で見つけた。「作る過程でフクシマ問題が頭をよぎった」。作品の力が、観賞した人たちの心を揺さぶる。

「窓の記憶／中之条町」(鈴木のぞみ)。



元体育館の広い空間に、役目を終えた窓枠を並べて、かつて眺められていた外の風景を浮かび上がらせている。暗闇を照らすライトは月明かりを演出しているようで効果的に感じる。かつて、この町にどんな生活があり、どんな会話が交わされていたのか。それを感じ取りたいと思って、しばし時間を忘れた。

□ 古民家再生プロジェクト・整備状況について 北山郁人

数年前から取り組んでいる一畝田の古民家再生の状況をご報告いたします。今年度からNPO法人 奥利根水源地域ネットワーク(代表理事:吉野一幸)が、中心となり整備を進めております。この団体は、藤原地区の活性化を目的に活動しており、古民家の再生や、空き家物件の調査、農産物やお土産品の開発などに取り組んでおります。

また今年度は、財団法人地域活性化センターから古民家再生の助成を受けることができ、それをもとに、整

備事業を進めております。4月から床下の解体を始め、家の周囲に溝を掘り、湿気対策をするとともに、11月からは矢部工務店さん(月夜野)さんにもお手伝いいただき、しっかりとした基礎を作ることができました。年度内には、床を仕上げる予定にしております。



◇環境教育関東ミーティング2013 参加報告

浅川 潔

12月7・8日の二日間にかけて、栃木県栃木市で開催された今回が10回目の環境教育関東ミーティングに、塾を代表して浅川と増井さんが参加しました。増井さんは8日の分科会13「草原を活用することで甦る地域の魅力」のプレゼンター、仕事の関係で8日だけの参加でした。総参加者人数105名、その内栃木県の参加者が半分くらい、韓国や中国かも10名参加、平均年齢は30代前半位でした。

初日のオプショナルツアーは9時～11時まで、ラムサール条約に昨年登録された渡良瀬遊水池（面積3,300ha 山手線の内側半分くらいの広さ）を見学しました。栃木県・茨城県・群馬県・埼玉県の4県4市2町にまたがり、栃木市が一番の面積となっています。

水が溜まっている谷中湖は、調整池なので、コンクリートでできていますが、夏にはカビが発生し水が臭くなるので、冬の間に水抜きをして乾燥させています。水がないと水鳥が来なくなるので、部分的にコンクリートを無くす実験をしているそうです。

谷中湖はハート型になっていますが、これは旧谷中村集落の中心地の神社、寺、墓地などを残したいという、地元の住民による反対運動があり、ここを残すことになったそうです。



ヨシ原には世界で2,000羽しかいないチョウヒが40羽くらい生息し、ワシタカ、ハヤブサ、サシバも生息し、シギ、チドリなどの渡りの中継地となっています。

会場は栃木グランドホテル、今回のテーマは「渡良瀬遊水池から未来へつなぐ環境教育」、最初に、呉地正行氏（NPO 法人蕪栗ぬまっこくらぶ理事長、高松健比古氏（日本野鳥の会栃木代表）と青木章彦氏（わたらせ未来基金代表世話人）の鼎談があり、取り組みを紹介してくれました。

蕪栗沼もラムサール条約に登録され（沼150ha、水田259ha）、水鳥のがんの越冬地として、環境保全、生物調査、固有性の環境教育、地域の啓蒙情報発信、町のグリーンツーリズムエコツーリズムの企画、農業との共生「冬水たんぼ」などの取り組みを紹介されました。



わたらせ未来基金は、ヨシ腐茎土づくり、湿地保全・再生プロジェクト、土取り場の再生、ヤナギ除去などの保全活動をしています。

ヨシ焼きは、ヨシズ組合と行政、消防団が主体に行っていて、防火帯は業者に委託しているそうです。今年のヨシ焼きは3年ぶりで良く燃え、一気に全面が燃えたそうです。

分科会Aは渡良瀬遊水池とラムサール条約に参加し、栃木農業高校農業環境科学クラブの2、3年生が、キノコ栽培の寒冷紗に葦簀を利用など、葦簀の利活用について発表してくれました。ヨシ1束100円を栃木県に使用料として支払っているそうです。

翌日の塾の分科会13は、参加者6名でしたが、呉地氏に参加していただけたので、地域の資源の物語づくりや誰にでもわかりやすいキャッチコピーが大事、生産性や効率性だけでは持続できないなど、貴重なご意見をいただきました。

◆ 伊勢神宮参拝・視察ツアー催行報告

稲 貴夫

森林塾青水の幹事を中心とした有志は、今年10月に第62回式年遷宮が執り行われた三重県伊勢市の伊勢神宮を参拝しました。この参拝旅行の企画は、神社本庁に勤務している私が担当させていただきました。その模様を解説を交えて報告します。

○伊勢神宮と式年遷宮

一般には「伊勢神宮」とか「お伊勢さん」と呼ばれていますが、正式な名称は「神宮」です。鹿島神宮や明治神宮と混乱しないように、「伊勢の神宮」と言ったりもしますが、神宮には、内宮（ないくう）と通称される皇大神宮（こうたいじんぐう）と外宮（げぐう）と通称される豊受大神宮（とうけだいじんぐう）の両正宮を中心に、14の別宮と109の摂社・末社・所管社があり、その125の宮社の総称が「神宮」なのです。

内宮のご祭神は、皇室の御祖神である天照大御神（あまてらすおおみかみ）で、第11代垂仁天皇の時代に、皇女倭姫命（やまとひめのみこと）に導かれ、五十鈴川の川上に鎮座されました。五十鈴川源流域の山々を背景に、その神域は四季折々の表情を見せます。

外宮のご祭神は、豊受大御神(とようけおおみかみ)で、第21代雄略天皇の時代に、天照大御神の食事を司る神として、丹波国から迎えられました。外宮には御饌殿(みけでん)があり、毎日朝夕二回、天照大御神をはじめ神々に食事をお供えするお祭りがおこなわれています。御饌殿は謂わば神様の食堂であり、その北側の忌火屋殿(いみびやでん)では、毎日神職が火鑽具(ひきりぐ)で火を熾し、神饌を調理しています。

神宮のお祭りは、年間約千五百回を数えますが、中でも10月の神嘗祭(かんなめさい)は、その年の新穀で調理した大御饌(おおみけ・神饌)を天照大御神にお供えし、一年の恵みに感謝する大切な祭りです。

そして、神宮では20年に一度、社殿を建て替え、およそ八百種、千六百点に及ぶ御神宝などもすべて新調して、大御神を新宮にお遷しする「式年遷宮」が行われます。そして、今年が第62回式年遷宮の年であり、10月2日には内宮で、5日には外宮で、そのクライマックスとも言える遷御(せんぎょ)の儀が斎行されました。

○せんぐう館を拝観して外宮を参拝

12月22日の昼過ぎ、三々五々JR と近鉄が乗り入れる伊勢市駅に集合した一行16名は、手荷物を預け外宮へと向いました。式年遷宮の年にお参りしようと、大勢の参拝者でにぎわっていますが、最初に昨年四月に開館した「せんぐう館」を見学し、神宮と式年遷宮について学習しました。御神宝の制作工程や式年遷宮の歴史、造宮に関する展示とともに、外宮正宮の妻側の実物大模型の展示もあり、一行は熱心に展示に見入りました。

その後、豊受大神宮の御垣内で特別参拝をしました。神職の先導で参入した一行は、清水塾長に合せて拝



礼し、続いて東に建つ旧社殿(左写真)を拝観しました。輝く新宮と比べて、役割を終えた旧社殿は、20年間の歳月を感じさせてくれます。

この旧社殿は来春以降解体されて、ゆかりのある神社の社殿などに再利用されます。

続いて外宮の第一別宮で豊受大御神の荒御魂(あらみたま)を祀る多賀宮(たがのみや)、土宮(つちのみや)、風宮(かぜのみや)と巡拝して外宮を後にしました。

その後一行は、駅前からタクシーに分乗、宿舎の内宮近くにある神宮会館に4時過ぎに到着し、それぞれ自由に時間をすごした後、6時から夕食懇親会で、それぞれ感想などを語り合いました。

○内宮を参拝し、御神楽を奉納

2日目は朝食のあと、内宮(右上写真)に向いました。

まず、外宮と同じく御垣内で参拝の後、神楽殿へと移動し御神楽を奉納しました。祝詞奏上に続いて、神宮



独特の乙女舞である倭舞(やまとまい)が、楽師の奏楽にあわせて、4人の舞姫により奉仕されました。

その後、内宮の第一別宮で天照大御神の

荒御魂を祭る荒祭宮(あらまつりのみや)、続いて風日祈宮(かざひのみのみや)をお参りました。風日祈宮は外宮の風宮と同じく風の神を祭る別宮で、毎年5月と8月には、風雨が順調で農作物が豊かに稔ることを祈る風日祈祭(かざひのみさい)が斎行されます。

風日祈宮を出ると、丁度、午前10時からの天長祭(てんちょうさい)に奉仕する神職が参道を参進しており、参道から神職の参進や忌火屋殿前でのお祓いの様子を拝観しました。因みに一般の日本人が誕生日を祝うようになったのは、明治時代に祝日として「天長節」が制定されてからです。それまで日本人は、正月元旦に一斉に年を取っていました。だから正月がめでたいのです。

○金田宮林部長と懇談

これでツアーは解散となりましたが、清水塾長、草野塾頭他数名は、神宮宮域林の経営担当者である神宮司庁の金田宮林部長と昼食をとりながら懇談しました。

五十鈴川の流域の神路山(かみじやま)、島路山(しまじやま)を中心とする神宮宮域林は、神域も含めて約五千五百ヘクタールの面積があり、神域の森厳な風致の保持、神域を流れる五十鈴川の水源涵養、そして、将来的な遷宮に必要なヒノキの御用材を育成する役割を担っています。もともとは式年遷宮の御杣山(みそまやま)として、千三百年前の第一回の遷宮よりヒノキの用材を供給してきましたが、次第に大径木が減少し、御杣山は周辺の山々へ、中世には木曾へと移りました。

その後、江戸時代には大勢の参宮者を迎え入れるための薪炭林として利用されたことから、宮域林は非常に荒廃しました。明治時代には国の管理となりましたが、大雨のたびに洪水がおこったとのことです。そこで大正時代には再び宮域林は神宮の管轄下に移され、再び御杣山として再生しようと、二百年後を見据えた森林経営計画のもとに育林が進められてきました。今回の御遷宮では、約七百年振りに宮域林よりヒノキの用材が供給されました。その割合は約二割ですが、およそ百年後には、量的にはすべて宮域林より賄えるとのことです。

金田部長からは、宮域林の経営のお話とともに、社殿などの屋根材の萱を供給する約百ヘクタールの川口萱地のお話もいただきました。今後の森林塾清水の活動にとっても非常に有意義なお話をいただき、今回の伊勢神宮参拝ツアーは全ての日程を終わりました。

また機会があれば、あらためて神宮参拝・視察の旅を企画したいと考えています。

1月

- ・立教大学・吉川ゼミ「環境と持続可能な社会」にて講義、当塾の活動報告
- ・みなかみ町役場・岸町長訪問～2012 暦年の活動実績報告、ほか
- ・環境ジャーナリストの会・シンポにて「流域コモンズのあり方」につき講演

2月

- ・のらえもん自然塾／コラボ合宿～雪そり遊び、かまくら&ボタづくり、など

3月

- ・講座「コモンズ村・ふじわら」～かまくら&キャンドルナイト設営支援、など

4月

- ・第 12 回定期総会&セミナー「利根川支流に生きる湿地の絶滅危惧種」(講師・小幡和男先生)
- ・のらえもん自然塾／コラボ合宿～青木沢峠&上ノ原散策、古民家見学、など

5月

- ・麗澤中「樹木観察会」(柏キャンパス)
- ・「一般参加歓迎プログラム」①～野焼きに替えて自然観察会、防火帯切り、など
- ・古民家整備活動の支援

6月

- ・「一般参加歓迎プログラム」②～青木沢峠の整備(落ち葉掻き)、上ノ原観察会
- ・全国草原再生ネットワーク第 7 回定期総会に参加

7月

- ・麗澤中「奥利根フィールドワーク」の受け入れ
- ・赤紫蘇ジュースづくり①(のらえもんコラボ活動)と古民家整備活動の支援
- ・「東京学習会」2013①『利根川の湖沼に学ぶ～茨城県自然博物館』開催
- ・「一般参加歓迎プログラム」③～草原の昆虫調べ、防火帯整備(青刈り)、など
- ・みなかみ町役場の担当窓口・木村さんと後任山口さんの歓送迎会

8月

- ・赤紫蘇ジュースづくり②(のらえもんコラボ活動)→地元と協働、96 本完成！
- ・防火帯切り(青刈り)
- ・BPA 主催「サンセットクルージング」に会員・会友が参加(24名)
- ・諏訪神社例大祭並びに 18 回「藤原区民祭り」に協賛

9月

- ・「一般参加歓迎プログラム」④～ミズナラ林の整備と生き物調べ、野点、など～エクスカッション(中之条)

10月

- ・「一般参加歓迎プログラム」⑤～台風のため1週間順延

11月

- ・「一般参加歓迎プログラム」⑤～茅刈り講習会&茅刈り、上ノ原観察会、など
- ・(株)西栗倉・牧代表(トビムシ取締役)をまちづくり交流課に紹介・打合せ
- ・のらえもん自然塾／コラボ合宿～どんぐり拾い、スケッチ、俳句づくり、など
- ・金井産業(沼田)に薪ストーブ用ミズナラ伐採木を供給
- ・「一般参加歓迎プログラム」⑥～茅ボッチの搬出と「山の口終い」

12月

- ・環境教育関東ミーティング～分科会「草原を活用することで蘇る地域の魅力」主催
- ・伊勢神宮参拝・視察ツアー催行

<付記事項>

1. 上記の他、月例「幹事会」を毎月第1水曜日に開催(除く、8月)
2. 講座「コモンズ村・ふじわら」ならびに「一般参加歓迎プログラム」、麗澤学園「奥利根フィールドワーク」他、全ての活動のインストラクター役を藤原案内人クラブはじめ地元の皆さま方に依頼、ご協力をいただいた
3. 刈り取った茅の総量＝3,010 束、うち地元(4人)＝2,750 束、ボランティア＝260 束(→藤原区へ寄贈／諏訪神社屋根替え用)
cf. 12 年度＝2,565 束
11 年度＝4,890 束(含む、小石川高校生 250 束)
10 年度＝2,300 束

* 地元 2,750 束は全量、町田工業が@100 円にて買上げに加え、当塾より環境支払いとして@50 円を上乗せ。町田工業の手により、北関東一円の国指定重要文化財の茅葺き屋根材として生かされている。

4. 赤紫蘇ジュースづくり

一のらえもんグループ(山口代表)・山口夫人の「赤紫蘇ジュースを藤原の名産にして、ご恩返しをしたい」とのご意向・提案を受け当塾が仲立ちをしつつ、地元の 4 軒の民宿の協力を得て始まったコラボ活動。
→今夏出来上がった 96 本は瓶詰にして、近隣民宿に配布。スキーシーズンの宿泊客の試飲に供すべく協力依頼。来年度以降、地元中心の活動に育て上げる方針。

5. グリーンツーリズム

⇒ 誘致人員延べ 871 人(「のらえもん」コラボ活動、含む。教育旅行、秋の健康ハイキング、ワラビ狩り、など不算入)

Cf. 12 年度＝1,087 人(サミット、含む。教育旅行、不算入)

11 年度＝1,007 人

10 年度＝ 907 人

09 年度＝ 830 人

⇒ 利用した民宿・旅館 10 軒(延べ宿泊 16 軒)
以 上

藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑦

中村智子

地元・中村智子さんの、見てほっとする“photo”ショット・コーナーも回を重ねて第7回。今号は、ご自宅のお座敷やお庭で見られる“藤原では身近な生き物たち”のオンパレードです！（編集子）



2013. 9. 6 キアゲハの幼虫 自宅にて



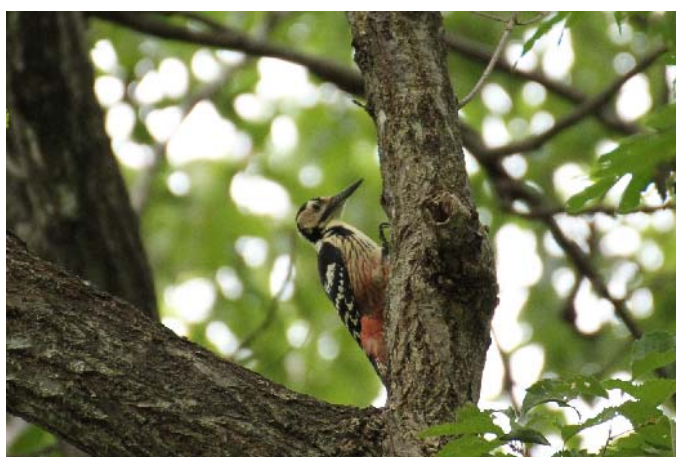
2013. 9. 26 ニホンヒキガエル 道路の側溝の藪にて



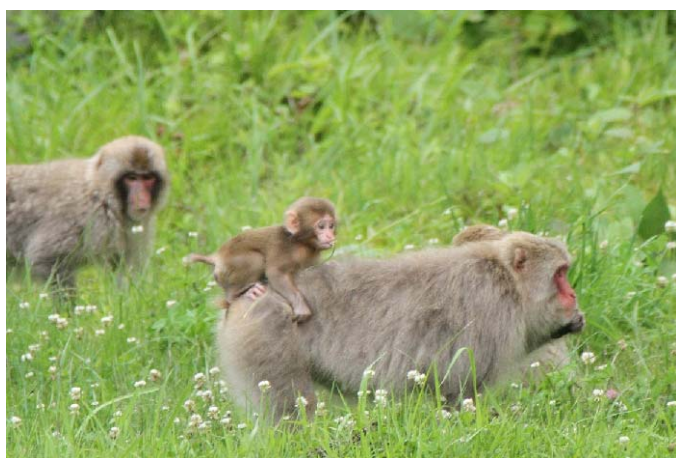
2013. 10. 11 ニホンカナヘビ 家の座敷にて



2013. 6. 4 カワラヒワ 自宅にて



2013. 10. 15 オオアカゲラ 自宅の裏の林にて



2013. 6. 25 ニホンサル親子 自宅にて

○はしやぎつつ滅び行く国おけら鳴く 金子與一郎

11月の日経俳壇で眼に留まった黒田杏子選句。まさに、現代の世相を見事にとらえた警世の名句ではないか。おけら(螻蛄)はケラ科の昆虫で地下に住み、夜飛びまわる稲の害虫。人間様も、螻蛄に嘆き悲しまれるような体たらくでは世も末。思うに、はしやぎ浮かれるのは平成の今に始まったことではなかった。明治の日清・日露戦争、昭和の大東亜共栄圏構想、朝鮮動乱特需、列島改造、〇〇景気、××景気、などなど。

花盛り散るより外はなかりけり

栗田樗堂



近世伊予を代表する俳人・樗堂の代表句。物質的欲望や名利を捨て、精神的豊かさを求める生き方を理想とした由。江戸の昔に明治以降の日本を読んでいたとは思えないが、これまた警世の名句と捉え戒めとしたいものだ。

○白湯一碗しみじみと冬来たりけり 草間時彦

わが意を得たりの感を強くする一句。平凡だがぬくもののある日常生活の有難さ。東日本大震災が我々に気づかせてくれたこと。年賀状を書く段になって、あらためて思い起こした。「身の丈の暮らしの中に充実のひとつを見つける。それが“幸齢者”の条件。一億皆がそうなれば、原発など不要。それが、本当の人類の知恵。ヒトが萬物の霊長を自負し地球生態系のキーストーン種として、生き物仲間たちから尊敬されるか否かの分かれ目・・・」。こんなくどい賀状は誰にも読んでいただけないが、とにかく来年もはしやぎ過ぎず「身の丈の暮らし」を楽しみながら実践したい。

○「忘年会」は「望年会」 個人の暮らしはもとより市民団体・森林塾青水としても、はしやぎ過ぎは禁物。そこで12月度幹事会兼忘年会に際し、恒例のアンケート「1年の振り返りと反省」を幹事諸兄にお願いした。過ぐる年の反省事項は、来るべき年の課題＝解決目標となるからである。

小生が一番に挙げた反省材料は「一般参加欲型プログラム」。講座「コモンズ村・ふじわら」を衣替えして新たに組み立てたが、期待に反して会員以外の一般参加者は、「森林文化協会」経由朝日新聞の読者以外には極めて少なかった。我々自身が参加を働きかける努力と一般の方々にも興味を持っていただけるような内容の検討が課題である。

二番目に挙げたのが、「上ノ原の指定管理者の責務

を果たすことは出来たのか」ということ。昨年中止のやむなきに至った野焼き。そのリベンジを誓った今年も、予定日の直前になって不孝なアクシデントが発生したとはいえ2年連続中止という残念な結果になってしまった。しかし、“火入れを心配する住民”の声を間接的に伝えただけで、指定管理者の責任において直接耳を傾けることは出来なかった。向後、その方々を含む町民対象の現地見学会などを開催、火入れの効用・意義のご説明かたがた防火帯をご案内し安全管理に万全を尽くしている旨を理解してもらおう努力が必須課題である。

○今年、特に嬉しかったこと 沢山あったので書ききれないが一番に挙げたのは、年の初めに藤原のAさんからいただいた年賀状。「あけましておめでとうございます。私どもの刈った茅に50パーセントの加増を有りがたく心から御礼を申し上げます」とあった。良かった！これぞ、我々が藤原に通い続けてこれた力の源泉。茅が刈り取られなければ、重要文化財の屋根は維持不可能。茅刈りと火入れは、草原の文化と生物多様性保全の両立を目指す「流域コモンズ」活動の原点だ。嬉しかったことの継続は今後の課題でもある。茅刈りの担い手と環境支払源資の確保が将来を左右する重要課題である。

山崎先生、小幡先生、西廣先生たちのご来訪も嬉しい限りだった。我々グループに足りなかった科学的知見を有するアカデミアとの協働の可能性が芽生えた。そして、流域コモンズ活動の新たな展開に希望が持てるようになったのだ。

積年の思いがようやく叶った嬉しいこともあった。(株)西栗倉の牧代表とみなかみ町まちづくり交流課との初顔合わせ・打ち合わせの場を設営できたのだ。当塾ではやりたくても出来ないこと。それは、中山間地域に新たな雇用をもたらすような六次産業を起こすこと。忙しかった牧さんが、ようやく利根川源流の山村振興に時間と知恵を割いてくれることになった。夢を持って、お手伝いをさせていただきたいものだ。

○来年の夢は「野守」 来年、個人的にやりたいこと。これまた沢山あるが、一番は上ノ原の「野守」。春夏秋冬、好きな時に出かけて行って生き物たちとの出会いと語らいを楽しみたい。そして、一人でも出来るゴミ拾いや外来種退治、道普請などで良い汗をかきたい。

時には「水守」にもなって、十郎太郎沢の源流遡行や天



音の滝を訪ねてみたりもしてみたいもの。

林内を縦横に走っているであろう木馬道。その奥はどうなっているのだろうか。きっと、昔々の炭窯の跡もあるはずだ……。

夢は つきない。ところで、

「野守」や「水守」って勝手に名乗っていいの？ 十二神さまにお断りしなければいけないのかも。(青)